

差異の政治学

上野千鶴子

二 セックスとジェンダーのずれ

セックスとジェンダーのずれを問題化したのは、ジョン・マナーとパトリシア・タッカーの『性の署名』(Money & Tucker, 1976)であった。ジョンズ・ホプキンス大学の性診療の外來をうけもっていたふたりは、半陰陽や性転換希望者などの患者を相手にして、ジェンダーがセックスから独立していることをつぎとめた。生物学的に性別を決定する要素には、遺伝子、内分泌、外生殖器などの異なった次元がある。だが自然界にある性別には、どのレベルでも連続性があり、男/女のような二項対立にはできていない。遺伝子ではX遺伝子とY遺伝子の組み合わせが性別を決定すると言われているが、現実にはXXX(超女性)やXYY(超男性)のような組み合わせも存在する。XXXの遺伝子をもった女性はまだ「超女性」と名づけられていないが、だからといって彼女がとくべつに「女らしい」外見やふるまいを持っているわけではない。X遺伝子とY遺伝子との二項的な組み合わせからなる遺伝子上の性差でさえ、二種類以上の組み合わせによる連続体を構成している。

内分泌の次元でみると、自然的性差の連続性はもつとつきりする。胎児発生の胎児はすべて女性の身体的機能をもっているが「マナーとタッカーはこれを「イグ原則」という)、発生の途中で特定のホルモンのシヤワーをあびて、男性機能が分化していくと言われている。発生学的にみれば、男性は「第二の性」なのである。このホルモンのシヤワーには発生の過程における臨界期があつて、それを過ぎるとあとではどんなホルモンを注入しても胎児の性別は変化しない。「女性ホルモン」「男性ホルモン」と便宜上呼ばれているこのふ

たつのホルモンは、その後も第二次性徴や更年期などにはたらいて、性機能を変化させる。内分泌学的にいえば、男性と女性のちがいは、ただこのホルモンのバランスのちがいにすぎず、それも一生をつうじて、また性周期をつうじて、変化する。ホルモンの連続性からいえば、世の中には「より男性的」もしくは「より女性的」なホルモン分布をもった個体、または状態があるにすぎない。

外生殖器についても同じことが言える。出生時の性別の判定は、とりあげた医師や助産婦によって外生殖器の形状から瞬時に判断されるが、これには間違いがしばしば発生する。発生の途中で、なんらかの事情で男児の外生殖器が矮小化したり、女児の外生殖器が肥大したりすることがある。まれには半陰陽といって男女の外生殖器をともにそなえて生まれてくる場合もある。性別判定の誤認があらかになるのは、ふつう第二次性徴期を迎えた時である。女の子だと思っていたのに声変わりがしたり、ヒゲがはえてきたり、いつまでたっても初潮がなかったりすることで、生物学的性別の誤認が発見されることがある。

すなわち、遺伝子、内分泌、外生殖器のどれをとっても、自然界には性差の連続性があるのに対し、文化的な性差は中間項の存在をゆるさず、男でなければ女、女でなければ男、と排他的な二項対立のいずれかに、人間を分類するのである。

マナーとタッカーは、性診療の外來で、性転換希望者の相談と指導にあたっていた。性転換希望者には男もしくは女として育てられて、第二次性徴期に性別の判定のまちがいに気づいたケースが多い。カウンセラーは当初、患者の生物学的な性別に心理的な性別を合わせようとする。そのほうが「自然」だからである。それだけではない。性転換には、苦痛の多い身体改造がともない、時間もお金もかかる。かれらは現実を変えるかわりに、「気持ちの持ちよう」を変えるよう、患者にすすめたのである。だがかれらが発見したのは、

患者の「性自認(ジェンダー・アイデンティティ)」はその年齢までに強固に形成されており、それを変えるのは容易でないこと、もしその「指導」を強制すれば、患者はアイデンティティの危機から自殺にさえ追いこまれないことであつた。多くの患者は、豊胸術、ペニス切除、造陰術のような苦痛の多い手術をほどこしてまで、自分の「性自認」に生物学的身体のはりを合わせることを選んだ。つまり、セックスにジェンダーを合わせるより、ジェンダーにセックスを合わせるほうが、まだ抵抗が少なかったのである。

「性自認」は二歳までの言語獲得期に形成される。ホルモンと同じく、この臨界期を過ぎるとその後は変化しない。心理学的な性差研究にはおびただしい蓄積があり、幼児の時から、男児は空間能力にすぐれ、女児は言語能力にすぐれているといった調査結果があるが、マナーとタッカーによれば、被験者が調査に応じられるようになるまでには、「性自認」は形成されてしまっていることになる。したがって言語によっておこなわれるあらゆる心理学的性差研究は、一種の「予言の自己成就」、すなわち言語によって形成された性差を言語によって追認するという作業になる。

マナーとタッカーの業績は、セックスとジェンダーのずれを指摘したにとどまらない。もっと重要なことに、かれらの仕事は、セックスがジェンダーを決定するという生物学的還元説を否定した。万一外生殖器に異常があつても、もし遺伝子やホルモンが性差を決定するならば、患者たちは周囲の性別誤認にもかかわらず、自然に「男性的」もしくは「女性的」な心理的特徴を発達させていたはずである。マナーとタッカーは、生物学的性差の基盤のうえに、心理学的性差、社会的性差、文化的性差が積み上げられるという考え方を否定し、人間にとって性別とはセックスではなくジェンダーであることを、明瞭に示した。人間においては、遺伝子やホルモンが考える、のではない。言語が考える、のである。

マナーとタッカーの業績は、つぎの二点にまとめることができる。第一に、生物学的還元説に対して、セックス(生物学的性差)とジェンダー(心理学的性差)とは端的に別なものとあらかにしたこと、第二に、だからといってジェンダーが自由に変えられるようなものでなく、その拘束力が大きいことを証明したことである。